

環境が人に与える影響

Influence that environment gives person.

1K04B236

大和 由晃

指導教員

主査 山崎勝男先生

副査 堀野博幸先生

目的

世の中には、練習時には良い成績を残しているのに、記録会や大会のような大勢の他者の前では極端にパフォーマンスが落ちる人が居る。逆に、普段はさえない人がぶっつけ本番であるのにすばらしい成績を残したりもする。そうかと思えば、賭け事となると普段よりも良いパフォーマンスを残す人も居る。このように、人はそれぞれの性格や緊張への耐性により、状況においてのパフォーマンスが上下することは、普段の生活の中でも時折気付くことである。このことから私は、周囲の環境が人のパフォーマンスにどのような影響を与えるのかを研究、考察することとした。

方法

【実験参加者】

男性16名、女性9名(21±1.2歳)の計25名に実験協力を依頼した。実験実施は、10時から17時の間として、早朝覚醒または疲労状態にある者には実験への参加を辞退してもらった。

【実験条件および課題】

本実験では、的当て課題を用いた。的から3 m50 cm離れた位置から参加者は投球した。的は、地面から1.5 mの高さに設定した。的の大きさは43 × 45 cmである。ボールはゴムボールを使用し、賞品は図書カード500円分を用意した。

環境条件は、参加者の端に人が居るだけの「ただの存在」条件、観察者が参加者に好意的な応援、評価をする「観察者」条件、応援プラス点数次第で賞品を参加者に贈る「報酬」条件の3つ

を設定した。データ収集後、3つの条件における参加者全体のパフォーマンスについて、環境要因の1要因(3水準)の多変量分散分析を実施した。環境要因が得点に与える影響を、Pillaiのトレースに基づき検討した。下位検定では、Bonferroni法に準拠した多重比較を行った。同時に、アンケートに書いてもらった参加者自身の緊張耐性への自己評価に分類し、傾向を考察した。その後、アンケートや実験中の会話で目立った参加者の感想を纏め、内観報告として検証した。

結果考察

多変量分散分析において、的当て課題における平均得点について3条件の有意な主効果が認められた。下位検定としての多重比較においては、「単なる存在」条件はそのほか2つの条件に比べて有意に得点が低かった。「観察者」条件と「報酬」条件については、顕著な違いが見られなかった。自己評価による緊張への耐性の種類により分類した群に関して検討を行ったところ、緊張に弱い群については、「報酬」条件で最も得点が高く、緊張に強い群は「観察者」条件と「報酬」条件でほぼ同値を記録した。しかし、緊張への耐性が普通であると自己判断を下した群については、それぞれの状況の変化にも顕著な得点の変化は見られなかった。アンケートによる内観報告については、緊張に弱い群はネガティブな感想が多く、緊張に対して普通であるとした群はポジティブな感想が多かった。緊張に強いと答えた群については、普通であると答えた群と同じようにポジティブな感想が多く、それに加え、実験への意見や継続の

希望など、より肯定的な意見を残す傾向があった。

結論

緊張への耐性について、普通であると答えた参加者群については、個人のパフォーマンスの高低はあったが、3条件の状況変化にもそれほど顕著な違いは表さなかった。これは、緊張に特別な反応を返さない分、実験に対しても普段どおりの気分で臨んだからであると考えられる。自己評価において緊張に強いと答えた参加者群については、「単なる存在」条件については緊張に弱い参加者群と同程度のパフォーマンスであったが、「観察者」条件、「報酬」条件については緊張に弱い参加者群より有意に高い得点を示したが、条件間に得点の差は見られなかった。このことか

ら、緊張に強いと答えた参加者群は、観察者の存在という状況への緊張の加重と、賞品の存在という状況への緊張の加重は、種類は違えども、同じ「緊張」として受け取り、安定したパフォーマンスを出したのではないかと考えた。

以上のことから、好意的な環境や他者存在は人のパフォーマンスに優位に影響を与えると結論付ける。それに加え、人の緊張耐性によってその影響が促進・抑制されることが判った。また、本実験では、観察者は実験参加者へ好意的な反応を向ける条件設定を用いた。そのためパフォーマンスも上昇を見ることが出来たが、今後は否定的な反応を向けた場合についてもさらなる研究が期待される。